移民局留置所にて

捕はれて　エホバの歌も　口乃中
ステームも　昼信心食事も　皆官費　君送りしが　嬉しくて
面會は　英語要事は　言ひ遺し　明け暮れに　つけても勝野　恙殿
何もかも　解らぬままに　時を待ち　窓越しに　見たる海を　忘れかね
戰して　平和乃君の　クリスマス　風邪ひいて　文の情を　妻に書く（支人）

◎愛妻の手紙

十二月二十七日朝シアトル発モンタナ行

金いらぬ　特別列車は　お供つき　妻の文　おちつき見えて　汝漢く
護送車の　日本男子に　我れも交りり　今拭いた　眼鏡が曇る　妻の手紙
警戒無し　無料列車に　窓も無し　安心して　安堵と　安らかに寝す　妻の文
護送車は　ミゾラ邊りか　一晝夜　心では　泣けど健気な　妻の便
國の為め　みぞらの雲に　日陰者　朗らかな　裏に淋しい　妻の文
モンタナ州ミゾラ町収容所にて　子も泣き　行こ淋しと　妻は書く
已が家に　細き煙を　立てなかし　立ち退きと　愛妻の手紙に　胸騒ぐ
主人として　道志忘れそ　愛妻の手紙　今日来らば　明日を待つ

◎愛妻の手紙　餘寒

黙するも　笑ふも同じ　囚はれて　妻病もと　便りある日や　風寒し
妻子思はぬ　者もなかりけり　日昼一つ　ミゾラの空に　瞬きも
戰乱の世なれば　忍べ妻よと　假寝の　夢破られて　妻遠し
和らぎの日を　神に祈りて　月冴えて　空に瞑想　妻思ふ
強くあれ　消くなぬやうにと　今日もまた　消えぬ妻の名　雪の上
一家みどろう　日の来るまし　陰膳が供へてあると　妻の手紙
妻子をば　思ひ過して　狂ひたる　旅の身は　目覚め勝ちる　餘寒哉

◎雪

人を笑はし　我れも悲しき　身の沈めど　△白雪や　神代ながらの　香も改つ
離り住む　事の淋しさ　身に沈めど　△天つ神　隔てぬ雪を　今日は賞で
君の面影　涙で霞し

DETAINED ALIEN ENEMY MAIL EXAMINED BY U.S.I.&N.S.

泉流

○離れ住む　事の淋しき　身に沁めど　君の面影　浮べて嬉し

△いかに姿は遠くとも　只一飛びに　逝すべは　なき虫すらも

大きな影と　ちるのを　私しの影は　君を覆ふ

○朝夕に　黙吟を変ず　身にちんど　牧れに堪しき　祈りなり

お、我が神よ　今ぞ汝　彼女のにを　守れかし

雲間共に　健やかに　安きを賜ひ　衾翼の

蔭に託れて　唯一人　人なき里に　祈る幸

△師走七日に　別れ来て　こゞうの里に　住び住い　望の逢瀬を

楽みに　君の映姿と　寝る時は　床温たかき　夜半の夢

胸の鏡に　宿し秘め　溢る涙　雪と消え　山の森に

来れば　小鳥も鳥も　一筋に　ピーンピーンと　巣に帰る

○こゞうを廻らす　白雪の山壁に　朝夕の陽に映ゆる　自然の眺望も

君の一顧にも　如かめ　いかなる大家の筆にも　所謂聖者の　うた歌も絵も

君の微笑には　及ばじ　生命は君の　裡に秘めて宿さぬ

君が見る度に　語る度に　笑う度に　湧出で　我れに注ぐ

神は御姿を　人の心の奥深く　秘め給ふ　君の愛

泉の如く　流れ出で　我れに注ぎ　汲めども盡きず　我れは永遠に生く

△我が妻は　夢路たどりて　遇いにきし。　美き夢を　胸に秘めて　待つ便り

雪の窓　越えて来たのか　妻の夢。　因らはれて　せめて妻よに　夢で逢ふ

あの綾ごと　れわし見度い　妻の夢。夢に見た　君の寝姿　今朝も見え

DETAINED ALIEN ENEMY MAIL EXAMINED BY U.S.I. & N.S.